昭和12年から戦時中の農作業と食べ物の思い出 **『共立百年史** 昔の思い出』からの抜粋 田中ヨシコ

*注:田中ヨシコさんは、 昭 和 12 川沿尋常小学校卒業

をするのも女がやらねばなりませんでした。 農家の家に生まれた私は、4歳の時から畑で働き、 小学校を卒業した頃から戦争が始まり、男の人たちは次々と兵隊に行き始めました。 牛や馬と共に生きてきました。 何

大変でした。家に帰ると畑仕事や牛の乳搾りをしなければ休まれず、また昔は馬を一家に た。ゴムぐつは1足あるとそればかりはくので、底が破れ、砂が入り、足にまめができて 出征 女子青年団が盛んでした。団長さんをはじめとして何事にも一所懸命でした。 3頭は飼っていましたので、男手の少なくなった時は馬牛の食べ物の用意も苦労でし して行かれる兵隊さん方のお見送りは共立から常呂まで歩いて往復したものでし

馬車やリヤカー、または自転車に積み、 牛乳は朝早く起きて、3、4頭の牛のお乳を手でしぼり、 毎日運びました。 豊川 の岡崎さんの集乳所まで

た。 で歌っていたことを思い出します。 になりながら、お国のためにと言ってがんばってきました。私の兄も1人戦争で死にまし なか手に入りませんでしたので、手作りのものもいよいよなくなり、裸足で足は傷だらけ また、 可哀想で仕方ありません。一緒に畑で草取りをしながら、 畑起こしは2頭曳きのプラウで、すべて馬でやりました。 当時流行った歌を大きな声 当時、 地下足袋もなか

内に好きになり、よく聴いたものです。 えるのが一番楽しみでした。年寄りは浪花節をよく聴いていました。私たちも聴いている テレビはありませんでしたので、蓄音機が唯一の娯楽でした。 レコードをかけ、 歌を覚

何人かはいるものです。私らはただ見るだけでした。 青年団主催の演芸会などもよくやりました。何をしても上手な人は今も昔も変わらず、

疲れがたまり、 うれしいものです。 終戦後は映画が大変盛んでした。常呂の町まで歩いてよく見に行きました。 苦労しました。でも、今でも思い出として忘れずにいられることは本当に 2 3日は

などはずいぶん食べたものでした。顔が黄色くなって恥ずかしい思いをしたものです。 とんやフライパンで焼くべったら焼き、またあんこの入った蒸かしまんじゅうやカボチャ おいしいものを食べていたような気がします。常呂川でとれたアカハラのウグイを焼き干 私の母は手打ちそばを打つのが大変上手な人でした。何もない時代でしたが、 よい出汁をとっていました。 お客様の時は二ワトリが犠牲になりました。すい けっこう

で自給自足の自分で作ったものを食べられたため、有り難かったと思っております。 終戦前後頃は調味料が不足でしたので大変な苦労でした。でも、 農家をしていたおかげ

森脇喜一、 中股秋治、 佐々木松雄、 片山松太郎の各氏が乳牛を導入し、 大友善九郎、 川西吉太郎、 芥川次郎太、 飼育 (共立百年史) 後藤熊吉

*注 昭和8年 下川沿 (共立) 女子青年団結成 (常呂村史)

注:昭和 11年 産業組合、上川沿に集乳所を設置(常呂村史 岡崎清によって上川沿(豊川)も集乳所設置、 以来、 イワケシュ郷土史) 酪農経営が本格化

(富丘百年史)

*注:青年団主催の演芸会は、戦後のこと。

除草など、それぞれが一生懸命働いたものである。 な面で運営上の苦労が多かったようである。 と変わってきた。 大し長期化するにつれて、 して、1町5反ほどを毎年借用して軍用エン麦を耕作していた。 「共立百年史」 (略) 支那事変が次第に拡大されていく中で、 の 出征兵士の留守宅の勤労奉仕として、 〈青年団〉 団員の兵役参加が続き、 から戦時中と終戦直後の活動を抜粋して紹介します。 (略) 青年団の年間恒例事業の内容もだん また、青年団そのものの運転資金と 次第に団員の数も減少し、 冬期間は薪切り作業、 戦争も世界大戦へと拡 夏は畑の いろいろ

演芸を通しての交流も盛んに行ったものである。 ないほどの大入り満員であり、 いう娯楽のなかった部落にとっては人気の的であった。 年団は部落の推進役として多方面に活躍したが、中でも青年団主催の演芸会は、これと 終戦後の昭和21年、 川沿青年団は解散して新たに共立青年団を結成した。新生した青 窓という窓も鈴なりという盛況であった。 会館の広い会場も立錐の余地が 青年団同士の

ばならな いという、 演芸会の内容もいちいちそれぞれの機関を通して占領軍司令部に提出しなけれ 今考えると馬鹿らしい手続きが必要であった。 (略)